

香取遺産

vol.161

社寺で見かける石造物「庚申塔」

- ①石田大神(小川1016)
- ②大宮大神(油田695)
- ③来迎寺(貝塚2005)

全国の社寺や道端でよく見かける石造物に、庚申塔があります。庚申とは、十干の庚と十二支の申の組み合わせによって60日または60年に一度回ってくる日や年のことです。

道教の教えでは、庚申の日に眠ると体内の三尸という虫が悪さをして寿命が縮むとされ、そのため眠らずに過ごすことを守庚申といいます。この考えは平安時代に日本に伝わり、江戸時代には神道や仏教の要素も取り入れられ、全国的に流行しました。修験者が庚申信仰を説き、その指導で信徒集団(講中)が作られたほか、神道では「猿田彦大神」を本尊とする庚申信仰、仏教では「青面金剛」を本尊とする庚申講を作り、夜を明かしました。江戸時代初期は熱心な信仰のもと勤行なども行われたようですが、時代を下るにつれ、相談や噂話を中心とした、気分転換をする社交場の要素が強くなりました。

こうした中、各地で庚申塔が建てられるようになり、特に寛政12(1800)年、萬延元(1860)年、大正9年の銘が多

い傾向があります。いずれも庚申の年であり、記念として建てたことがうかがえます。昭和55年の銘の物もあり、現在でも庚申講が続いている地域もあります。

庚申塔の形状は多様で、大きく文字塔と刻像塔に分かれます。文字塔の場合は写真①のように「庚申」、「庚申塔」、「青面金剛」、「猿田彦」などが刻まれます。刻像塔の場合は青面金剛が多く、写真②のように一面六臂で鬼を踏みつけ、その下に三猿がいる場合もあります。また、写真③の宝篋印塔の形状をしたものは、全国に6例しかなく、市の指定文化財となっています。

庚申塔を見かけたときは、先人たちが夜通しにぎやかに過ごした姿に、思いをはせてはいかがでしょうか。

図 生涯学習課 ☎(50)1224



① 庚申塔

② 青面金剛像

③ 「守庚申」宝篋印塔